インクルーシブ教育を推進する教員のマインドセットに関する一考察

是永かな子
（高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門　高知発達障害研究プロジェクト）

A Study on Mindset of Teachers Promoting Inclusive Education

Kanako Korenaga

Kochi University Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster Education Unit, The Research Project on Kochi Developmental Disabilities;

Abstract：In this study, I analyzed the mindset of teachers who promote inclusive education. The followings have been clarified. The trainer, Dr. Simula, used psychoanalysis for the poorest workers in Brazil. By facing the negative parts of human beings such as competition, ordering, and oppression by the capitalist system, it is important to think about humanity such as symbiosis, cooperation, and freedom in order to build a democratic system. The content that is summarized and embodied as a methodology is the training booklet ″ TRANSFORMATION OF HUMAN RELATIONS From competition to cooperation″. The followings were mentioned in the interview. Focusing on the good points of the child changes the behavior of the child, and it is meaningless to just blame the child, and changing the viewpoint changes the life, so the classroom is changed from ″competition″ to ″symbiosis″. And, as social concept of human being, the components of ″freedom″, ″internal mirror″, ″internal victim″, ″love″, and ″common responsibility″ are shown, and human beings have both ″ humans wealth ″ and ″ hindrances ″. Since the attitude of facing others is also one's inner self, it is also a matter of one's judgment whether to focus on the good side or the bad point of others. On the other hand, the CONSCIENTIA method as a concrete methodology for advancing training was structured as individual and group learning. After understanding ″humanity, cooperation, nature and the future ″ and ″social concepts of human beings″, discuss by clarifying their roles, positions, issues, and stages. Finnish school teachers who have received such training embody multifaceted support for the well-being of children. Discuss how to support children at school, keeping in mind what is required in today's society and the Finnish National Core Curriculum. They promote early observation and early treatment by screening for all children and utilizing pupil well-being team, and guarantee the right to receive support from children as three-stage support. In this way, the emotions and thoughts of the mindset and the views on others are all projections within the self, and all the words and actions toward others are also actions toward the self. Teachers as human beings also include denial, oppression, criticism, and malicious intent as ″hindrances″ and are prone to negative thinking, especially in a competitive society. With that in mind, it was suggested that we need to continue learning about how teams can help children well-being.

キーワード：インクルーシブ教育　教員　マインドセット
Key words: Inclusive Education, Teacher, Mindset

1. 問題の所在

1994 年の「特別ニーズ教育世界会議：アクセスと質」においてサラマンカ声明[1]が採択された.サラマンカ声明では,対象を限定することなく,すべての子どもを包み込むインクルーシブ教育の実現を目指している.また2006年12月に国連で採択された障害者の権利に関する条約[2]の第 24 条には「包容する教育制度(署名時の仮訳,inclusive education system)」が示されている.そして2015年9月,国連サミットで採択された持続可能な開発目標SDGs[3]においても目標 4.として「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し,生涯学習の機会を促進する(外務省仮訳,Ensure inclusive and equitable quality education and promote lifelong learning opportunities for all)」ことが提唱されている.

「排除」を逓減しつつ,多様性を尊重する「包摂」はいかにすれば可能か.本報告ではフィンランドで実施されている教員対象の研修内容に注目し,インクルーシブ教育推進の役割を担う教員のマインドセット[4]について検討する.

2. 研究の目的

本研究は「対象を限定することなく万人を包み込む教育」としてのインクルーシブ教育を推進するために必要な教員の思考様式としてのマインドセットについて,ブラジル及びフィンランドとスウェーデンで教員研修を実施する精神分析医が示す研修内容を参考に,調査研究と文献研究の方法を用いて考察することを目的とした.

3. 研究の方法

本稿では,学力保障とともにインクルーシブ教育を推進するフィンランドの取り組みに着目する.フィンランドに注目する理由としては,1970 年代末から初等教員を含めて修士レベルの教員養成を行っていること,研究に基づいた教員養成を行っていることから,学び続ける教員のモデルの一つになると考えたためである[5].調査研究は,2019年3月28日にフィンランド・ヘルシンキ市のZACHARIAS TOPELIUS学校を訪問して,聞き取りを実施した.聞き取り調査対象者は,ブラジル出身で,ブラジルのみならずフィンランドやスウェーデンで教員研修を担当する精神分析医のPertti Simula氏(以下,Simula氏)を対象とした.またSimula氏を招聘して研修や教育実践改善を行う通常学校と特別学校の機能をもつZACHARIAS TOPELIUS学校の学校長及び特別教員にもSimula氏の研修を受けた上での実践について聞き取りを実施した.文献研究は訪問時提示資料や関連文献を対象とした.倫理的配慮に関しては,聞き取り対象者に,論文投稿を含めた研究の目的と聞き取り調査の意図,質問項目を英語の文書で提示し,了承を得られた項目のみを回答してもらった.

4. 結果

4. 1. 精神分析医のSimula氏の構想の背景

Simula氏は2020年5月21日にフィンランド国営放送「yle」のインタビューを受けている[6].

インタビューで Simula 氏は,これまでの経過を以下のように語った.当初はブラジル・サンパウロの製造業ヴァルメット(Valmet)社に勤務しており,経済的及び社会的に安定した管理職の立場を有していた.しかし,その職を辞して約20年間,精神分析を用いて国で最も貧しいとされる土地のない農場労働者のために働いてきた,と.

Simula 氏は以下のように問題を指摘する.人々の嫌悪は,フィンランド,スウェーデン,ブラジルのどこでも似ている.資本主義システムでは,権力は富裕層に集中し,平等は競争によって達成されない.競争はすでに就学前から始まる.ある場合は賞賛され,そうでない場合は叱責を受ける.それは競争精神を生み出す.競争は常に対立である.絶え間ない競争や抑圧された感情は私たちを病にする.障害は構造にある.私たちの現在の社会構造は不公平である.そして,社会の不平等も市民を病にする.競争,条件付け,達成目標は,人間の発達を阻害する.さらに,不安や他の否定的な感情を教え込まれる.問題はそれらが引き起こしたメカニズムによって解決はされない.そのため構造変化や精神的・社会的革命が必要なのである,と.

Simula 氏は以下のように学校や競争の在り方も批判する.学校制度は子どもを序列に置く.子どもは,幼い頃から

学習能力とスキルで判断される.これは非常に有害である.競争は利己的であり,不平等である.強い競争力は,共感する能力も制限する.学校修了後,仕事の競争が始まる.仕事では誰が一番か,つまり誰が利益を上げるかを競う.私たちは絶え間ない競争に慣れているため,ほとんどの人がその意味に疑問を抱くことさえない.しかし個人レベルでは,絶え間ない競争が人々を疲れさせる.競争に加えて,特に感情の抑制は吐き気を引き起こす.私たちの社会は反感情的であり,それが構造的悪にも貢献する.私たちは不安と恐怖の中で生きている.そのため,競争は教育と仕事の構造において完全に放棄されるべきであり,感情は自由に経験され,評価され,受け入れられるべきである.そうして初めて,世界は平等になり,連帯することができる.ユートピアは直接的な民主主義であり,人間の人間主義的な概念である.草の根レベルで,これらのことを推進していく,と.

Simula 氏はブラジルの労働者協同組合を巡回して,人類の人道主義的概念の原理を 20 年間議論してきた.その結果,人がいかにお互いを受け入れることができるか,そして感謝して向き合うべきかについて,共有できる具体的な方針と方法を開発した.Simula 氏は,フィンランドとスウェーデンの教員に同じ基本原則に基づいて研修を行う.

Simula 氏は 2020 年 5 月現在,新型コロナウイルス対応のためにフィンランドに留まっている.彼の永住地はブラジルのサンパウロにあり,帰国を切望している.新型コロナウイルスは私たちの多くを恐怖と不安に直面させ,恐らくは死をも想像させる.Simula 氏自身のきょうだいとその妻は新型コロナウイルスに感染した.それは彼に不安を引き起こした.その中で最も重要なことは,感情に立ち止まり,否定的な感情を尊重することである.何か他のこと,例えばアルコールや薬物で感情を取り除いたりするべきではない.この方法でのみ,感覚を解放できる.Simula 氏の考えと方法についての詳細は,彼の最近のフィンランド語の著書「怒りと悪意に立ち向かう方法(Miten kohdata vihaa ja ilkeyttä,Into,2020)」で読むことができる,と.

このように Simula 氏はブラジルでの経験を踏まえて,競争や資本主義,序列化などの排除を念頭においた方法論を具体化した.北欧においては学校教員を対象とした研修などを実施しつつ,学校組織や社会がより民主主義的になるように活動を継続している.

聞き取り調査の際にも,Simula 氏が今行っていることは,教員に対して研修をすることであり,競争から共生への意識の転換を導くことである.達成することは容易ではないが,方向性を変えようとすることは大事である,と指摘していた.

4. 2. Simla 氏の研修資料「人間関係の変容　競争から協力へ」の基本枠組みの検討と聞き取り結果

Simula 氏は教員を対象とした研修において「人間関係の変容　競争から協力へ(TRANSFORMATION OF HUMAN RELATIONS From competition to cooperation)」[7]の資料を用いる.

資料は以下のように始まる.人間関係の競争から協力への転換は,仕事での喜び,献身,そして一体感,良い関係を意味する.これらは生活の質の基本的な側面であり,国境を越えて協力する必要があるグローバリゼーションの拡大に不可欠である.この資料は,この目的のためにコンシェンティア法(conscientia method)(ラテン語の conscientia は意識 consciousness を意味する)と呼ばれる方法を提供する.

この方法は,スウェーデン,フィンランド,ブラジルの学校関係者や他の専門家グループによって,コンシェンティアインスティテュート(Conscientia Institute)が主催するオープンネットワークの参加者と 20 年以上にわたって開発,試行,使用されてきた.この方法を適用することで,他者(子どもや教員)を挑発し,叱責し,非難する必要性が大幅に減少すること,学級を落ち着かせることができて対立が少なくなるなどの変化を認識している.教職員と学級集団の両方により良い活動の動機づけと連帯を意識させる.この方法は,そこに到達するための具体的な方法を提供する.

資料は三部から構成されている.第一部は,方法と研修の枠組みである.第二部では,人間の価値づけ(valorization)の方法について説明し,第三部では,共同体(community)の価値づけの方法を示している.

また Simula 氏はスウェーデンの国民学校関係教職員組合(Svenska Folkskolans Vänner Association,SFV)と協力して,「哲学者ソクラテス(Socrates)」の助けを借りて,学級を競争から共生へ転換する方法を説明した「学校を

変える！ -子ども,教師,ソクラテス」[8]の動画を作成した.

写真 1　動画トップページ

写真 2　「競争」の教室での教員と生徒の「分離」

写真 3　「ソクラテス」と教員との対話

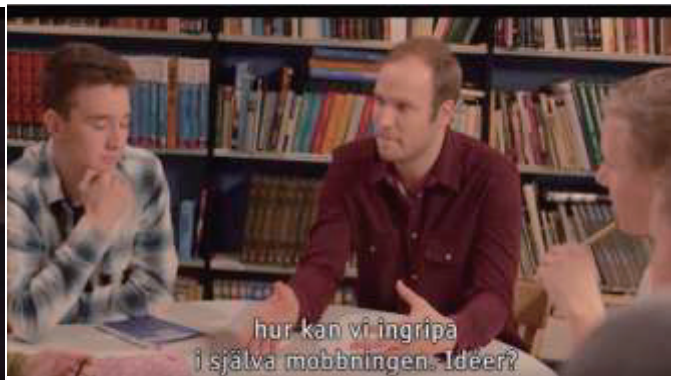

写真 4　「共生」の教室での「平等」な教員と生徒の関係

出典：FÖRÄNDRA SKOLAN! Eleven,läraren och Sokrates,https://www.youtube.com/watch?v=6_k7r6vhn7E(2020 年 9 月 14 日参照)

Simla 氏は競争から共生へ転換について以下のように説明する.現在,競争社会から共生社会への移行が求められている.「競争」に対しては「分離」が導かれ,「共生」に対しては「平等」が導かれる.「競争」の社会では良いことをしたら「ご褒美」が与えられ,悪いことをしたら「罰」が与えられる.

支援が必要な子ども,教育を妨害する子ども,無関心やモチベーションの欠如,中傷,いじめなどに向き合うと教職員は欲求不満と無力さを感じる(写真 2).人の良いところを増やして意識の持たせ方を変える.良いところに注目すると子どもの行動が変わるのであり(写真 4),子どもを非難するだけでは意味がない.見方を変えると人生が変わる.そのため指導者の見方を変えることが重要である,と.

また Simula 氏は,表 1 を示しつつ,以下のように説明する.

表 1　競争と教育における教育,動機付け,リーダーシップの比較

競争(COMPETITIVITY)-その結果	協力(COOPERATION)-その結果
競争,分類,エゴイズム,社会の二極化,疎外.	競争と分類を排除する-平等,勇気付け,意識化.
賞賛,報酬,批判,罰-条件付きの行動,要求,反乱,疎外.	健康(人間の価値の意識)や無条件の価値の高揚,意識のすべてにわたって強化する.
誰もが上司/教員が問題を解決するのを待っている-受動性,欲求不満,疎外.	直接参加して共同責任を組織する-誰もが自由に取引し,勇気,価値を持ち,意識することができる.
問題を解決するための要求-無力,麻痺及び/またはア	要求を切断して問題を解決する-問題の原因を防ぎ,解

ウトブレイク.	決する.
トラブルが発生した場合,不安,怒り,罪悪感,無力さを感じ,これらの感情を抑圧することで反応する-慢性的な自己抑圧,犠牲者,麻痺,または燃え尽き症候群.	トラブルが発生した場合,不安,怒り,罪悪感,無力感を感じ,これらの感情を受け入れることによって反応する-自由感,責任感,内的バランス,意識化.
これは問題を引き起こし,慢性化させる.	これは問題を防ぎ,それらの原因を排除する.

出典：Pertti Simula(2019)TRANSFORMATION OF HUMAN RELATIONS,From competition to cooperation.p.4.

例えば,集団内で騒ぐ人がいるとする.一方で,静かに集中してほしいという人がいる.そうすると子どもは教員に対して「静かにさせてほしい」と伝える.その場合,教室の中で規律を保つのは教員の問題となり,結局子どもは受け身になる.それは,競争社会の論理であって,共生社会ではない.

そして「不安」の場合は「自分が良くない」と思う.何かトラブルが起こった時も自分のせいだと思ってしまう.失敗した時自分のせいとしてしまうのは,自分の気持ちに素直に反応していないからであり,自分の中に入って落ち込むのである.「悲しい」「さみしい」と思って最後に爆発してしまう.それは競争社会である.否定的な問題で起きた感情は否定的に怒ってもいけない.それでは変わらない.「共生」では,自分の気持ちを受け入れ,バランスが自分でとれるようになることをめざす.競争社会においては,反応が消極的であり,要求されることが多く,悪循環に陥る.「共生」は,予防的であり,良い環境へ導く.

Simula 氏が行う研修の内容は,人間性(humanity),協力,自然(nature),未来に注目しており,フィンランドの新しいナショナルコアカリキュラムで重視される以下の六事項と合致していると指摘する[9].それらは第一に,子どもが価値づけられ(valued),高く評価(appreciated)される必要があること.第二に,子どもは,関与する(involved),独立した役割(independent actors)をもつと感じる必要があること.第三に,自分自身,他者,社会,自然との関係を築くのに役立つ人類のビジョン.第四に,真実,美しさと優しさの追求.第五に経済的及び社会的平等の追求.第六に,世代を超えた地球規模の責任意識,である.

Simula 氏は,これらの目標はフィンランドが求めているものであり,共生社会の方法論にも合致している,そしてこの方法論は学校だけではなく,会社など組織には当てはめることができる,と指摘する.

人間関係の変容のための方法論としては,競争(competition)から協力(cooperation)へ移行させるために表 2 の 3 つの枠組みを示す.

表 2　競争から協力への人間関係の変容のための 3 つの枠組み

人間関係の変容 競争から協力へ	
1,枠組み(FRAMEWORK) 1.1 人的及び集団的価値つけ 1.2 人間の社会的概念 1.3 課題とそれぞれの方法	
2,人間的価値づけ(HUMAN VALORIZATION) 2.1 自分を知る 2.2 感情の尊重 2.3 価値に耳を傾ける 2.4 実現のフォローアップ 2.5 逆批判(inverted critic)によるフィードバック	3,集合的価値づけ(COLLECTIVE VALORIZATION) 3.1 直接参加の導入 3.2 価値評価による参画 3.3 集団を用いた自己認識 3.4 権限を与えられた過半数

出典：Pertti Simula(2019)TRANSFORMATION OF HUMAN RELATIONS,From competition to cooperation.p.40.

そして上記枠組みを用いて学級での課題についての対応方法を検討すると,以下のような対応関係になると示す.注意を継続的に必要とする子ども(対応枠組み,2.1,2.3,2.4,2.5,3.1,3.2,3.3,3.4).集中力の問題(対応枠組み,2.1,2.2,2.32.5,3.1,3.2).騒がしい教室で沈黙を求める方法(対応枠組み,3.1,3.2,3.3,3.4).怠惰,受動性,不満,動機付けの方法(対応枠組み,2.1,2.2,2.3,2.4,2.5,3.1).能力を過小評価し,問題を誇張する習慣(対応枠組み,2.1,2.2,2.3).罵り,冗談,軽蔑表現の使用(対応枠組み,2.3,2.5,3.1,3.2,3.5).課題に着手しない人を集中させる方法(対応枠組み,2.4,2.5,3.2).トイレに出ていって,水を飲む(対応枠組み,3.1,3.2,3.3,3.4).常習的な遅刻,頻繁な欠席(対応枠組み,2.2,2.3,2.5,3.1,3.2,3.4).アルコール,タバコ,薬物の使用(対応枠組み,2.1,2.2,2.3,3.1,3.2,3.3,3.4).学校への攻撃(対応枠組み,2.1,2.2,2.3,3.1,3.2,3.3,3.4).暴力,攻撃,いじめ(対応枠組み,2.1,2.2,2.3,3.1,3.2,3.3,3.4).自傷,うつ病(対応枠組み,2.2,2.3,2.5,3.1),であると.

例えば,Simula 氏は「3.3 集団を用いた自己認識」を用いる場合,人には個人と集合の役割があるため,一定の役割を果たすこと,集団の一員として認められることなどに注目する.人間は社会的な概念であり,どの子どもも伸ばしていくことが大事で,長所を活かしていくことが重要である.集団をどのように高めていくのか,子どもが参加できているか,お互いに認め合っているのかなどを確認しつつ,集団を通して自分を高めることが必要である.自分のことは自分では見えていないので,周りから教えてもらうこともある,と指摘する.

また,周りの人が自分のことを分かっていないのではないかと思ったり,周りの人の方が問題に気づいたりすることもある.しかしそれは非難することではない.悪いことだけ非難するとその子が防御することになる.子ども同士で非難し合う場合の対応としては,「共感」でアプローチすることなどが考えられる,とする.

そして他にも,何に困っているのか,名前を出さずに困っていることを出して話し合うなどもよい.他者に対してどのように対応するのか,問題に対して協力するのである.人を非難すると自分を非難することになるので結局は自分にも返ってくる.団結や連帯を作るには何が大事かを考えた際には,言葉は聞いている人に伝わっていくことを認識しておくこと,人に対して要求したり,人を非難したりすることは止めることであり,「雰囲気」をつくる組織をつくることである,とする.

4. 3. 「人間関係の変容 競争から協力へ」における人間の社会的概念

本稿はマインドセットに注目した論考であるため,資料の内容のうちとくにSimula氏の人間に対する考え方に注目して,検討する.

Simula氏は人間の社会的概念(SOCIAL CONCEPT OF HUMAN BEING)を以下の5つの構成要素で示す.

それらは第一に,「自由(Freedom)」である.それは次のように説明される.「私たちには,感じることや考えることの自由があるが,行動する自由が制限されている.自由は責任を意味し,責任は自由を前提としている.それらは同じことを意味する.そのため,私たちは自分の感じ方に責任がある.私たちは自分自身や他人の感情を受け入れ,尊重する必要がある.例えば,喜び,愛,弱さ,恐れ,怒り,恥,悲しみなどである.私たちには,自分の感情の中で正確に見られ,尊重される必要がある」と.

第二に,「内部の鏡(Internal Mirror)」である.それは次のように説明される.「私が他の人に見ているものは全て,ある意味で私自身にもある.私たち全員が全ての人間の資質を持ち,性格や特性に関しては,お互いが内面の鏡である.あなたが幸せなら,私自身の喜びにも気づくが,あなたの喜びは私の不満の意識を呼び覚ますこともできる.私たちは類似点を介して,お互いの鏡であるが,逆もまた同じである.私があなたに本当に見たくないのは,ある意味,私の中にある」,と.

第三に,「内部被害者(Internal Victim)」である.それは次のように説明される.「私が行っていることは,私の気持ちを物語っている.私の行動(action)は私の感情の表れである.良い行動は良い感情的な行為(act)から生じる.破壊的な行為は,否定的な感情的な行為から生じる.私が他人に対して行うことを私は自分の中で私自身に対しても行う」,と.

第四に,「愛(Love)」である.それは次のように説明される.「悪は善をもってしか治せない.害は別の悪で治すこ

とはできない.誰もが愛する権利と愛の必要性を持っている.愛とは,良いことを尊重し,破壊的な行動を防ぐことである」と.

第五に,「共通責任(Common Responsibility)」である.それは次のように説明される.「共通の責任には平等が必要である.誰もが参加し,重要な決定をする同じ権利を持っている.それが連帯の根拠である.誰かが他を攻撃した場合,集団は攻撃を防ぐために一緒に行動する」と.

Simula 氏は人間には「財(wealth)」と「障壁」があるとする.「財」は以下の 13 である.1 知覚能力(見る,聞く,触る,嗅ぐ,味わう,感覚),2 記憶(過去を特定する),3 直感,「シックスセンス」,4 愛,優しさ,責任,集中力,5 勇気,率先,持久力,6 創造性,想像力,熱意,7 常識,8 正直,正義,倫理的心,9 美,美的心,10 自己規律,衝動の制御,11 特別な才能,12 学習能力,知識の蓄積,13 身体能力,美しさ,強さである.すべての人間はすべての資質を持っている.したがって,私たち一人ひとりは,私たち自身の方法で,さまざまな程度で,さまざまな方法で,すべての人間の「財」を持っている[10],と.

Simula 氏は聞き取り調査の際にも,問題解決の際には人がどのような「財」をもっているのかを意識すること(Consciousness of human wealth)が[11]も重要であると指摘する.それは例えば集団は,人それぞれの人間の「財」の意識を強化するために,隣の 2 人があなたの中に見える 3 つの人間の「財」を示す.この「財」の 1 つが逆に批判されている可能性もあるため,枠組み 2.3 の「価値に耳を傾ける」を参照する.その後,誰でも自分の意見を述べることができるのである,と.

次に「障壁」は,1 感情的否定の習慣：不安,恐怖,不満を感じることが多く,これらの感情を抑制することによって反応する,2 意識の抑制(抑圧):意識に対する恐れ/怒りに反応する,3 自分自身と他者を理想化する(完全主義,壮大さの幻想,自己愛),4 嫉妬(jealousy),妬み(envy),悪意：良いものを見たくない,否定的なことに集中する,否定的な方法で感じ,考え,行動する,5 エゴイズム,である.第一に,不安,恐怖,不満を感じることが多く,これらの感情を抑制することによって反応する「感情的否定の習慣」.第二に,意識に対する恐れ/怒りに反応する「意識の抑制(抑圧)」.第三に,完全主義,壮大な幻想,自己愛の「自分自身と他者の理想化」.第四に,良いものを見たくない,否定的なことに集中する,否定的な方法で感じ,考え,行動する「嫉妬,妬み,悪意」.第五に「エゴイズム」である.私たちの誰もが完璧ではないので,ある程度,あらゆる種類の「障壁」も持っている.これらには図 2 の「内部の鏡」の考え方が反映される[12],と.

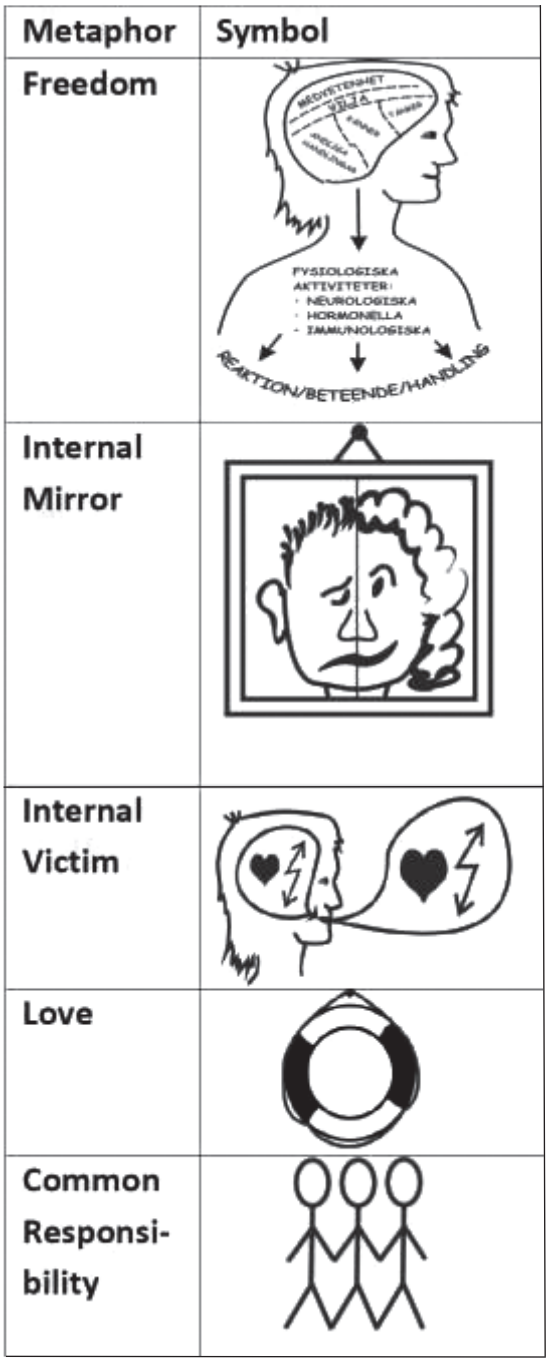

図 1 人間の社会的概念の 5 つの構成要素
出典：Pertti Simula(2019)TRANSFORMATION OF HUMAN RELATIONS From competition to cooperation,p.7

4．4．　コンシェンシア(CONSCIENTIA)法を適用する手順

Simula 氏が行う研修の手順は以下である[13].

第一に,課題の定義として,集団または自身が活動と協力の実現を発展または改善する可能性や認識の必要性に基づいて,主要な課題を選択して説明する.この課題は端的にし,議論の時に誰もが理解できるようにする.

第二に,方法論の背景に関する認識として,「人,地域社会,自然の価値の評価」や「人間の社会的概念」などについて理解したうえで,議論を行うようにする.目標は,課題に対処する通常の方法を使用しないように集団を導くことである.背景的考え方を使用すると,通常の方法とは異なる集団内の認識とアイデアの出現が促進される.

第三に,課題参画者(challenge players)の定義として,課題の文脈では,主たる参画者,個人,及びサブグループが示される.たとえば,集団の中に,自分のためだけに情報と決定を保持する権威主義者がいる場合,彼は参画者の 1 人である.あなたが状況に関与していて,課題に対処したいなら,あなたは参画者である.権威主義的な行動に同意しない人々の集団は別の参画者である.権威主義者を支持する人々はもう一方の参画者である.このようにして,重要な参画者を示して,課題に関連した集団の社会的文脈を構築し,具体化することができる.

第四に,問題状況における主たる参画者の行動習慣の説明として,まず,集団は問題の中で最も重要な参画者を選択して定義する.次に,状況における主たる参画者の最も一般的な行動について協議し,説明する.参画者の行動習慣に注意が向けられる.これは批判や要求なしで行われる.

第五に,問題に気づいた人が主たる参画者として感情と意識を説明する.問題はどの感情,人間の「財」と「障壁」を各参画者で個別に意識する必要があるかもしれない.集団は,感情を 3 つ,人間の「財」を 3 つ,「障壁」を 2 つ抽出するという 3 つの質問について協議する.これは個別に実施してもよい.関連する選択を示すこともできる.例えば感情の選択肢は,「喜び,愛,関与(commitment),勇気,要求,感謝,無力,劣等感,不安,苛立ち,恐れ,心配,怒り,反乱,静寂,悲しみ,恥」などがあげられる.各人は自分の回答を紙に書き留め,これらの回答を収集して集合リストにまとめる.

第六に,参画者に適用する方法の選択として,その状況にいるすべての参画者が助けを必要としていると考えられる,主たる参画者を選択する.集団は課題について話し合い,各参画者で使用する方法として 1 つまたは複数の手段を選択する.以下は,この資料に示されている手段の一覧である.

人間的価値づけ(HUMAN VALORIZATION)の手段：自分を知る(2.1),感情の尊重(2.2),価値に耳を傾ける(2.3),実現

表 3　手順のフローチャート

1)調査する問題とその前向きな課題への変換ための説明。

↓

2)方法論の背景に関する議論と認識：
-人間関係と協力の変容(資料第 1 章)
-人間の社会的概念(資料第 2 章)

↓

3)問題に関与する主たる参画者の定義。これには、個人、サブグループ、および/または集団が含まれる。

↓

4)問題に直面した各参画者の行動習慣の説明。

↓

5)問題に気づいている主たる参画者の感情と良心の説明

↓

6)各参画者が適用する 1 つまたは複数の方法の選択：
-人間的価値づけ
-共同体(community)的価値づけ

↓

7)各参画者が選択した適応(application)計画の評価と検討
-要求の優先順位
-使用方法(application)の簡便さ

↓

8)各参画者が選択した方法の実行

↓

9)実施した手続きの省察と評価および可能な計画の強化または手続きの継続

出典：Pertti Simula(2019)TRANSFORMATION OF HUMAN RELATIONS From competition to cooperation,p.17

のフォローアップ(2.4),8 逆批評家によるフィードバック(2.5).

社会的(social)価値評価の手段：直接参加の導入(3.1),価値評価による参画(3.2),集団を用いた自己認識(3.3),権限を与えられた過半数(3.4).

第七に,選択した手段の適応計画として,課題のさまざまな優先順位と各手段の適用の簡便さを評価及び検討して,選択した適応方法を各参画者でどのように活用するかを計画する.

第八に,方法の実行として,各参画者のために選択された方法は,実行者を選択し,必要な時間と空間を配置することによって適用される.

第九に,手続きの省察と評価として,手続きがどのように機能したかについての考察と分析をする.必要に応じて,可能であれば,新しい計画を実行するために手順が改善される.

4. 5.　フィンランドの学校長及び特別教員に対する聞き取り調査

Simula 氏による研修を継続的に行っているフィンランドの学校の校長及び特別教員に対する聞き取り調査からは以下が明らかになった.

教員は子どものウェルビーングを支援している(Support to well-being).具体的にはテストの点数に焦点化するのではなく,子どもが学んでいるかをみとることが重要であり,そのために教員は学び続ける必要がある,と.

ちなみに,OECD の PISA の結果報告書においても,学校における心理的(Psychological),身体的(Physical),認知的(Cognitive),社会的(Social)など多様な側面からの Well-being の保障が指摘されている[14].

また,「子どものウェルビーングのために通常学級でどのようにスクリーニングを活用し,サポートしていくのか」について聞いたところ,次の回答を得た.フィンランドでは全ての子どもが支援を受ける権利があり,課題が顕在化した子どもについては「子ども援護(芬:Oppilaiden hyvinvointi,英:Pupil well-being)チーム」として巡回 SSW,校長,特別教員等で支援策を協議する制度がある.子ども援護チームは,指導とカウンセリング(Guidance and counselling)について,多方面から評価できる人の集まりで,必要に応じて,健康にかかわる学校看護師やソーシャルワーカー等が関与する.支援を受ける権利が全ての子どもにあることを確認して,ナショナルコアカリキュラムの内容にどこまで参画できるか,また集団の中で関係性ができているのかについて評価する.他にも,学期に 1 回,読字書字算数について 1 年生から対象にするスクリーニングを行う.これは学習障害がないかどうか確かめるテストである.学級担任は教科のテストの実施と分析を担当し,特別教員は読字書字等のテストを行う.テストで課題が顕在化すると特別教員による支援が入る.読み・書き・単語が読めるか・意味が分かるかのスクリーニングテストの結果が集約される.第二段階のスクリーニングとしては,同じアルファベットが続くとそのアルファベット消す作業を課す問題,形を見て区別する課題,ディスレクシアが疑われるときはどこで躓くか,どの文字が読めないかを検討するための単語を用いた課題,意味単位で文字を区切る問題,文章の意味を意識して図る課題を課して,文字や単語が見えているか意味が取れているのか等について確認を行う.この第二段階スクリーニングの採点は特別教員が行う.結果をプロットした場合,通常は 10 段階中 4～6 のあたりの結果が示される.8 以上の結果を示す子どもには通常学級内においても難易度の高い課題が与えられるなどより高次の学習を行う.そのため例えば 3 年生で 5 年生の課題を学ぶ子どももいるのである.同時に,1～2 のあたりの結果を示す子どもは具体的な支援を検討する,と.

そして,教員として大事にする観点は,ICT も含めて子どもが「学び方を学ぶ」こと,世界について知ること,他者を気遣うこと,人間・市民として育つこと,そして参加の保障である.現在フィンランドの教育で急務なのは,就学前教育保育の改革や移民の問題,デジタル化への対応,就業支援,技術系コースの教育移行支援,より多くの子どもが大学で学べるための支援,ポートフォリオなど,と指摘し,課題が多岐にわたっていることがうかがえた.

その中で例えば ICT に関しては,子どもを対象としたアンケートでも ICT を使うことが前提であり,3 年生から 5 年生は自分でパソコンに入力し,1 年生もパソコンを用いて回答することを支援する.近年はポートフォリオや成績の入力にも ICT を使いる,と.他にも,就学前教育に関して,子どもの保護者を対象とした国レベルの「就学に向けての準備」パンフレットもあり,運動,睡眠,食事など大事なキーワードが示されていて,各家庭に配布されている.そ

して,子どものウェルビーングを考えた際には,集団と個別の支援,健康ケア,そして学校給食も大事であり,無料の給食は北欧ではスウェーデンとフィンランドだけ保障されている,と.

Simula 氏の研修資料[15]では,フィンランドの新しいナショナルコアカリキュラムの重点項目について言及されていたことについて質問したところ,次の回答を得た.フィンランドのナショナルコアカリキュラムは「全ての子どもが独特である」,「全ての子どもが支援を受けられる権利がある」ことを強調したものである.三段階支援はナショナルコアカリキュラムに示されており,全ての学校に取り入れられている.ZACHARIAS TOPELIUS 学校にある病弱学級や知的障害学級が最も特別な支援の必要性が高いとされる三段階支援として位置づく.三段階支援を受ける子どもは必ず個別の計画を持っている.三段階支援が必要な病弱・病気の子どもの場合は通院が始まる早期教育 0 歳から就学まで一貫して支援する.他にも支援が必要な場合活用できる補助器具はパソコンなどがあり,間違えるとパソコンのプログラムが教えてくれたり,文章が見えやすく表示できたりする設定もある.教材の調整を具体化するときは担任教員と関係者の話し合いで決める.よりいっそう支援の必要な子どもには国立リソースセンターも活用する,と.

フィンランドの学習支援において,学習方法,教材決定に関して学習の自由度はある.しかし教科内容と特別教育等に関して,何が大事なのかをナショナルコアカリキュラムが提示するようになったので,近年のナショナルコアカリキュラムは分量が増える傾向がある,とのことであった.

5. 総合考察

本稿では,インクルーシブ教育を推進する教員のマインドセットについて,教員研修を実施する精神分析医が示す研修内容を参考に,調査研究と文献研究の方法を用いて考察することを目的とした.本稿で明らかになったことは以下である.

研修を担当する Simula 氏はブラジルで貧困層に位置づけられる労働者に精神分析を用いつつかかわることで,資本主義システムによる競争,序列化,抑圧などの人間の負の部分に向き合うことにより,民主主義システムを構築するためには共生,協力,自由などの人間性(humanity)に焦点化した思考が重要であることを見出した.その内容を集約し,方法論として具体化した内容が,研修資料の「人間関係の変容　競争から協力へ」である.

Simula 氏に対する聞き取り調査では,子どもの良いところに注目すると子どもの行動が変わるのであり,子どもを非難するだけでは意味がなく,見方を変えると人生が変わるため,「競争」の教室から「共生」の教室に転換するには,指導者の見方を変えることが重要であると指摘された.そして,人間の社会的概念として,「自由」,「内部の鏡」,「内部被害者」,「愛」,「共通責任」の構成要素を示しつつ,同時に人間は「財」と「障壁」両方を持っているとする.他者に向き合う態度は自分の内面でもあるため,他者の良い面に着目するのか,悪い点に着目するのかは自分の判断の問題でもある,と.

研修を進める具体的方法論としてのコンシェンシア(CONSCIENTIA)法は個人と集団の学びとして構成されていた.「人,地域社会,自然の価値の評価」や「人間の社会的概念」などについて理解したうえで,それぞれの役割や立場,課題,段階を明確にして議論を行う.

そのような研修を受けたフィンランドの学校教員は,子どものウェルビーングのための多面的な支援を具体化していた.現代社会で求められることやナショナルコアカリキュラムを念頭に,学校で子どもをいかに支援していくかを議論する.すべての子どもを対象としたスクリーニングや,子ども援護チームの活用によって早期発見早期対応を行い,子どもの支援を受ける権利を三段階支援として保障する.

このようにマインドセットとしての感情や思考,他者に対する見解は全て自己内部の投影であり,他者に対する言動は全て自己への行為でもある.人間としての教員も「障壁」としての否定や抑圧,非難,悪意などを内包しており,特に競争社会ではネガティブ思考に陥りやすい.その点を念頭に,いかにチームで子どものウェルビーングを支援するかについて,学び続け,成長し続ける必要性が示唆された.

6．謝辞

本研究は科研費(18K02793)の助成を受けたものである.

註・引用文献

[1] THE SALAMANCA STATEMENT AND FRAMEWORK FOR ACTION ON SPECIAL NEEDS EDUCATION WORLD CONFERENCE ON SPECIAL NEEDS EDUCATION: ACCESS AND QUALITY Salamanca, Spain, 7- 10 June 1994.

[2] Convention on the Rights of Persons with Disabilities and Optional Protocol.

[3] Department of Economic and Social Affairs (2015) Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development.

[4] ドゥエック(2019)はマインドセットを心(考え方,行動,信念)の在り方として説明する.子どもに対して,「難しいパズル」を示したときに,「うーむ」,「大好き」,「きっと頭がよくなるよ」など様々な反応があることに気が付き,その前提としての心の在り方について検討した.キャロル・S・ドゥエック著,今西康子訳(2016)『マインドセット「やればできる！」の研究』草思社.ブロックら(2016)はその著作のなかの「成長的マインドセット」に注目して,教育においてもその考えが適応できるとした,アニー・ブロック/ヘザー・ハンドレー著,佐伯葉子訳(2019)『マインドセット学級経営』東洋館出版社.

[5] リトヴァ ヤック‐シーヴォネン編,ハンネレ ニエミ編,関隆晴 翻訳,二文字理明 翻訳『フィンランドの先生 学力世界一のひみつ』桜井書店.

[6] Jatkuva kilpailu ja tukahdutetut tunteet sairastuttavat meidät - vika on rakenteissa, sanoo psykoanalyytikko Pertti Simula,https://yle.fi/aihe/artikkeli/2020/05/21/jatkuva-kilpailu-ja-tukahdetut-tunteet-sairastuttavat-meidat-vika-on(2020年9月14日参照).

[7] Pertti Simula (2019) TRANSFORMATION OF HUMAN RELATIONS,From competition to cooperation.

[8] FÖRÄNDRA SKOLAN! Eleven,läraren och Sokrates,https://www.youtube.com/watch?v=6_k7r6vhn7E(2020年9月14日参照).

[9] 前掲7,p.3.

[10] 前掲7,p.9.

[11] 前掲7,p.37.

[12] 前掲7,p.9.

[13] 前掲7,pp.11-17.

[14] OECD (2016) PISA 2015 Results STUDENTS' WELL-BEINGVOLUME III.

[15] 前掲7,p.3.

令和２年（2020）10月14日受理
令和２年（2020）12月31日発行